

## 編 集 後 記

第63回日本消化器外科学会総会が、去る7月16～18日に平田公一総会会長のもと開催された。演題採択数は3827題と過去最高であり、爽やかな夏の札幌に多数の学会員が参加し、熱心に発表・討議が行われた。最新の研究の発表だけではなく、教育的プログラムも生まれ、さらに消化器外科の社会的側面についても検討された。総会に参加して、学会と学会員の持つパワーを強く感じた。そのパワーをぜひ本学会誌にも再現していただきたい。

さて本号では2編の原著論文が掲載されている。1編は胃粘膜下腫瘍に対する腹腔鏡・内視鏡合同胃局所切除術に関する論文である。近年、natural orifice transluminal endoscopic surgery (NOTES) など腹腔鏡技術と内視鏡技術の融合をめざした研究が始まり、本論文の術式もこのような新しい観点からの治療法として位置づけられる。もう1編では重症急性膵炎の予後因子が男女間で異なることが示されている。性差医療・医学の概念が消化器領域にも導入されつつあり、本論文はこのような新しい視点からの研究である。

今後も読者からの独創的な研究論文の投稿を期待したい。

(杉山政則)